第１回　不登校・中途退学対策検討委員会
会議要旨

１　日時

平成２７年５月２７日（水）午後５時００分から午後７時００分まで

２　場所

東京都庁第二本庁舎１０階　２１３・２１４会議室

３　議事

（１）不登校・中途退学の現状、これまでの取組と検討の視点
（２）その他

４　出席者

（１）委員

松田恵示委員長、藤平敦副委員長、古賀正義委員、酒井朗委員、佐藤妙委員、堀有喜衣委員、藤村静男委員、森富子委員、榛原紀子委員、渡邉仙二委員、佐々木雅人委員、奥地圭子委員、河野久忠委員、稲葉薫委員、後藤啓志委員、近藤豊久委員（矢田部裕文委員の代理出席）

（２）冒頭挨拶

中井敬三 東京都教育委員会教育長

５　中井教育長冒頭挨拶（要旨）

昨年１２月に、東京都のこれからの１０年を示す「東京都長期ビジョン」を策定した。同ビジョンでは柱の一つとして、自らの力で未来を切り拓（ひら）くことのできる若者が東京を舞台に活躍していくという将来像を描いている。

一方で、不登校・中途退学という問題は以前から存在するが、様々な対策を講じても大きな成果にはつながらないという、非常に悩ましい現実がある。不登校・中途退学はそれぞれの子供により要因は様々だが、学習の遅れや生活の乱れを招き、将来の進学・就労にも大きなマイナスの影響を与えかねない重大な問題を内包している。

不登校・中途退学対策を更に強化していく必要があるが、一つの方策だけで解決できるものではなく、いくつかの方策を複合的に、効果的に適用していくことが必要である。また、現場での対応に当たっては、教員だけで対応できるものではなく、いろいろな職種の方々のチームワークにより対応することが必要である。

今後、国の動きを踏まえつつ、都としての総合的な不登校・中途退学対策を今年度中にまとめていきたいと考えている。

ついては、委員の先生方の豊富な御経験、御見識を、委員会の議論の中で十分に出していただいて、私どもに御指導、御協力いただきたい。

６　委員長の選任、副委員長の指名

委員の互選により、松田恵示委員が委員長に選任された。松田恵示委員長が藤平委員を副委員長に指名した。

７　事務局説明

８　意見交換（主な発言要旨）

＜不登校・中途退学の現状＞

○　不登校の背景は様々で、貧困や親の状況などが複雑に絡んでいることもある。

○　学校教育に合っている子供ばかりではない。学校に行けていないことで、自分には価値がないと思っている子供もいる。学校だけが学びの場ではないという認識をもってほしい。

○　本校では、不登校はどの子にも起こりうるという認識をもっているが、具体的には「不登校０（ゼロ）日目」という考え方をとり、日頃、子供たちが何か不安を抱え込んだまま帰ることのないよう気を配り、「明日から不登校にならないかな」と確認してから子供を帰宅させる取組を行っている。

○　高校での中途退学は１年生のときに起こりやすいが、中学校時代にその芽はあるのではないか。

○　高校１年生の中途退学については、原因として生活の乱れという要因が大きい。

○　中途退学者というと、非行少年というような偏ったステレオタイプのイメージもあるが、「都立高校中途退学者等追跡調査（24 年度）」において、発達障害の問題や家庭の問題など様々な課題を抱えている、多様な中途退学者の存在が分かった。

○　上記の「追跡調査」では、中途退学者とともに進路未決定卒業者についても調査したが、両者の間に大きな質的な差はなかった。

○　就業支援の場にはいろいろな背景をもった人が来るが、そこでは、キャリアカウンセリングだけでなく、臨床心理的なケアのサポートが必要な人も相当多い状況である。

＜問題意識、今後の検討の視点＞

○　今後の検討に当たっては、小・中・高の各学校段階という縦の流れと、学校を起点とした関係機関や団体とのつながりという横の流れといった両方を捉えて考えていくことが必要である。

○　不登校・中途退学の捉え方が時代によって、社会によって変化している。学校教育を受けることができない子供たちの問題をどう捉えていくのか、という広い視点が求められている。

○　学校以外の場で学んでいる子供の指導要録上の出席扱いの措置については、同じ自治体であっても、出席扱いとする学校があったり欠席扱いにする学校があったり、対応が異なっているのが問題である。この点も議論が必要である。

○　現在、国は、フリースクール等の学校以外の場での学びを支援し、学校だけでなく多様な成長を認めようとしている状況だが、そのことも考慮に入れて検討していただきたい。

○　支援の到達点をどこに置くのかが課題である。学校への復帰や就学・就労へ向けたものになると思うが、何が本当の課題かを見極めて対応することが大事である。

○　中途退学者を減らすというだけでなく、真の要因をしっかり見極めることが大切である。中途退学してよかったというケースもある。どうやって自分にあった人生を充実させていくかという視点が必要である。

○　ひきこもっている本人も、ひきこもりの原因はよく分からないことが多い。様々な要因が積み重なって適応できず、その積み重ねにより、自分から動きづらくなっているタイプの者が多い。早期発見・早期対応が大事である。

○　不登校の背景には、家庭での貧困の問題もある。親の経済状態をどう改善し、家庭の貧困をどのように子供に連鎖させないようにしていくかも課題である。

○　適応指導教室に通う児童・生徒は学校とつながっているという実感があるが、適応指導教室にも行くことができない児童・生徒をどうするかということが課題である。

○　フリースクールにも適応指導教室にも通っていない子供について把握できるのは、親の集まりなどの場である。親同士が自分たちの経験を出し合い、支え合うことに、もう少し力をいれてもよいと思う。

○　不登校の児童・生徒や中途退学者を福祉・労働などの専門の関係機関や民間団体にどうやって導いていくかが課題である。

○　何らかの団体に所属していれば支援を受けることができるが、そこから出てしまうと支援が非常に少なくなってしまう。学校という所属団体があるうちに、一人で何とかできる力を身に付けてほしい。

○　中学校の時から就労支援機関とのつながりが持てないか。高校に進学して、すぐに中途退学する生徒は、中途退学後どこへ行けば支援を受けられるかが分からないことが多い。

○　就労支援機関からどこにアクセスすれば、中途退学者等に就労支援の場に来てもらえるかが悩みである。いったん学校など所属している団体を離れた人にアクセスするのは難しい。辞めた後でも、所属していた団体とのつながりを保つことや何らかのネットワークに入ってもらうことなどが必要かもしれない。

○　支援のネットワークをうまく機能させるためには、ネットワークの中心となる人に幅広い見識と調整する力が必要になる。

○　スクールソーシャルワーカーの業務は多岐にわたるため、スーパーバイズ機能や人材育成の機能をしっかりさせておくことが大事である。

○　中途退学だけでなく、転学した生徒についても、課題として取り上げていく必要がある。転学後、どういう状況なのかなどを確認する必要がある。

以上